

# 工作編

タコムのメルカバの工作ポイントをピックアップ。全体写真でどこをディテールアップしたのかもご紹介しよう。

## オススメのディテールアップパーツ



- 01 **ラウベンモデル 1/35 イスラエル国防軍水ジエリカセット**  
イスラエル軍の水用ポリタンクはガリラヤの平和作戦に参加するほとんどの車両に複数積まれている。製品は実物を徹底再現し、質感を活かすためにパーツの合わせ目はそのまま、無塗装で使用する。
- 02 **マスタークラブ 1/35 メルカバ Mk.I 連結可動履帯 金属製**  
数あるアフターマーケットパーツの中でも、最高の出来と謳われるマスタークラブの可動履帯。本作は足回りがよく自立つづともあり、精密感を高めるために層かき済み。価格(5832円)にふさわしい効果がある。
- 03 **エシュロンデカール IDF ターレットタクトイカルマーキング ペイントマスク**  
マスキングシートに数字がレーザーカットされ、それを対象に貼って塗料を吹き付けて仕上げる。デカールのように段差が出来ずリアルに仕上がる。本作では未使用だが番号を手軽に変更できる。
- 04 **エデュアルド メルカバMk1 エッチングパーツ (タコム用)**  
正直、使えるパーツは少ないのだが、エッジングのグリルの再現度は非常に高い。車体の形状に合わせた折り返しや、グリルの目が繊細で扱いに注意が必要だが、取り付けると精密感がとても上がる。

## STEP.01

### 金属履帯で重厚感アップ! 効率よく組む方法



マスタークラブの履帯の組み立ては、写真のように5枚重ねてレジン製のピンを一気に差し込むと効率が良い。ピンは奥まで差し込むだけで良いが、接合部にもあるのでメタルプライマーを脱落防止に塗っておく。

履帯の数は片側に110枚使用するが、数えながら組み立てるのは面倒だ。そこであらかじめ組み立てた履帯を10枚、それを二つ重ねて20枚といった具合に重ねていけば、一枚ずつ数えずに組み立てられる。

予備履帯にもマスタークラブの履帯を使う。予備履帯は車体に接続されたフックに引け、座金で固定される。フックをあらかじめキットの予備履帯にモードされたフックを利用する。履帯の連結部と同じサイズのピンを使ってフックの引け掛かりをリユーターで彫る。引け掛かりを彫ったフックは、予備履帯から切り出して写真のように一つずつマスタークラブの履帯にはめ込んで、瞬間接着剤で固定する。

## STEP.02

### 防楯カバーに立体感をだして見せ場にする!



01 キットの防楯カバーは、淡白で質感に欠ける。そこで高尾製の金属ヤスリを使って、カバー前面にシワのモールドを入れる。シワを彫る際のコツは、時間間に入れないことと幅に強度を付けること。

02 シワのモールドに強度を付けるときは、幅以外にも深さにも変化をつけることで雰囲気が増す。ただヤスリで彫り込むと幅が広がってしまうので、ピンポイントで深さを出したいときは、エッチングソーで彫り込む。

03 防楯と砲身を繋ぐジャバラ部分のモールドも、単調で物足りない。実物を見るとジャバラの節にも細かいシワが入っているのを再現する。この手のシワは砲弾型のピンを付けたリユーターを使うと再現しやすい。

04 ジャバラの先端はキャンパスの中が実感できるように、上面に砲身の丸みを付け、側面と下面はキャンパスのたるみを強調するように彫り込む。この作業は、ガイアノーツのマイクロセラブレッドの刃が効果的。

05 砲塔に接着した防楯は、カバーと砲塔の間をパテで埋めておく。防楯カバーは加工前(写真左)とその後を見くらべるとわかるように、シワや縫い目、ジッパーなどの要素を足すことで、砲塔上面の密度が増しているのがわかる。キットは整理はされているものの、実車では要素が詰まっている。直線面で構成された砲塔に、有機的なキャンパスを入れると質感の変化がついて、この部分がよく自立し、作品の見せ場になることができる。

ここまでの行程で、シワのエッジが硬く不自然な印象を感じるころは、ワイヤーブラシやヤスリでエッジを丸め、最後に流し込み系の接着剤を塗って表面の荒れを滑らかにする。

さらにM2機関銃のマウントと防楯の隙間を埋めるために、エポキシを使って防楯の開口部を造形する。この部分のディテールはデザートイーグルの「メルカバMk.1 ディテール写真集」の写真が参考になる。

## STEP.03

### 荷物を満載にして実戦に投入された雰囲気を出す!



01 年代が同じ、レジェンドの[IDF Centurion Stowage set]から適当なパーツを組み合わせて、荷物を満載する。ただバスケット内は見えないので、各種プラ材を重ねて量増しする。これらは最終的に一つの固まりとして接着して使う。

02 レジンの荷物は、ただ置いておくだけでは車体から浮いてしまう。そこで荷物を塗り、荷物の隙間にエポキシを盛って車体にフィットさせる。なお後でロープやベルトで固定することを意識して、引けリジフを付ける。

03 スパチュラや爪楊枝で造形したシワは、パテが硬化する前にタミヤのアクリル溶剤で表面を滑らかにする。溶剤は筆に含ませて塗り、シワのモールドによって厚さや曲線などを使い分けると、さらに複雑なシワを造形できる。

04 パテが硬化したらスパチュラで表面を仕上げ、なお先ワセリを塗っておいたのでバスケットから荷物を簡単に外すことができる。荷物は外しても、塗りがヤスリがけ以外にも、塗装もしやすくなる。

05 バスケットの側面に積まれた荷物も、ワセリを塗ったところからエポキシを盛った荷物を押さえてフィットさせる。このとき、はみ出したパテは荷物のシワになるように造形しておく。実感がでる。

06 全体にサフェーサーを吹いて表面を滑らかに仕上げた後は、鋼線を使ったひもやエポキシで作ったベルトを取り付ける。ひもやベルトも衝突にならないように、食い込みシワやグロケットを再現して雰囲気を出す。

## STEP.04

### ベルトを作ってみよう



01 デュロロパテで作ったベルトを荷物に取り付けて、荷物が固定された状態を再現する。主材と硬化剤を練ったパテをシリコンコートされたクッキングシートに挟んで薄く伸ばし、硬化後に短冊状に切り出してエッチングのバックルを通す。

02 砲塔にモードされたフックに、デュロロパテで作ったベルトを通したように取り付ける。デュロロパテは硬化後もゴムのように弾力があり、凹凸のある車体にもよく馴染む。また瞬間接着剤で接着しやすい。

## DETAIL UP POINT ディテールアップポイント

- 1 ガリラヤの平和作戦で使用されたMk.1は、前部フェンダーが欠損した状態をよく見かける。キットのフェンダーはエッチングで切りはずし、間仕切りやボルト、パイプなどをプラ材で組み込んで仕上げる。
- 2 グリルに、エデュアルドのエッチングパーツを使用する。キットのモールドを超音波カッターで削って、内側にはプラ板でスリットを再現。このパーツのスリットは繊細で曲がりやすく、取り付けは最後に行う。
- 3 1979年より部隊配備されたMk.1は現用車両としても古く、第2と第3世代の間に位置する。そのため構造部分が多く、初期のMk.1には滑り止めが施されていないので、部分的にラッカーパテで構造表現を行う。
- 4 初期のMk.1は予備履帯を固定する座金がキットの位置とは違い、履帯の後端に噛み込みにしている。また座金自体も一回り小さい。あと砲塔の予備履帯はキットの4枚から2枚減らし、方眼1枚ずつ装備する。
- 5 7.62mm機関銃には5mm丸棒から削り出したサーチライトを装備。ライトレンズはウェーブの4mm径のホースにタミヤリックゲルを貼ったもの。電源の配線は後部のベリスコッドを抜いて、車内に引き込んだ。



- 6 車長、装填手ハッチ横の小銃ラックには、ドラゴンの現用マシンガンセットに入っているガリルを装備する。ただ戦車兵が装備するガリルはSAR用タイプなので、実銃を参考に銃身を切り詰めてラックに納めた。
- 7 初期のMk.1を見ると、砲塔側面の4箇所にある吊り下げフックにO字形のシャックルを取り付けられている。写真から取り出すと、アール社のKV-1、KV-2用シャックル(R-18)が丁度いいサイズなので取り付けた。
- 8 キットのワイヤーは若干太く、ラックに納めると固定ピンが差し込めない。そこでモデルカステンソフトステンレスワイヤー(線径0.7mm)を使用。取り付ける時に実車を参考に、部分的にねじっておくと実感が増す。
- 9 満載された荷物は高く積みすぎると低姿勢のカッコいいシルエットが崩れる。荷物のボリュームは高さをそこそこに、横幅と前面に密度を出す。ただ車長用と装填手用のハッチに干渉しないよう注意する。